Kagawa University
香川大学
International Office News
インターナショナルオフィスニュース
第3号　2010(平成22年).9.30

巻 頭 言

インターナショナルオフィス オフィス長 副学長(国際･連携担当)　田港　朝彦

昨年10月に国際・連携担当副学長を拝命し、平成22年４月からインターナショナルオフィス（Kagawa University International Office；略称 KUIO）のオフィス長に就任しました。

平成21年４月に新たに発足した KUIO は設立２年目を迎え、本学の国際化の基本方針である「地域に根ざした国際化」、「国際的通用性を備える人材の育成」、「国際化のための環境整備」をいかにして本学の教育研究活動に浸透させ、また、教育研究の成果として具現化させるかということに日々腐心しております。

具体的には、学生がキャンパスにいながら国際化を実感でき、将来の海外での人生設計までも考えられるような環境づくり、また、そのような環境を作るために、海外の大学・研究機関との学術・研究交流の促進、本学の立地している地域のみならず、交流相手先を支える地域とともに推進できるような国際化を進めていきたいと考えております。

このため、KUIO の活動に対して教職員の皆様方から忌憚のないご意見をお寄せいただくとともに、ご支援並びにご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

インターナショナルオフィス 副オフィス長　飯田　豊彦

30年余りの間、四国電力及びその関連組織で仕事をしてまいりましたが、この度、香川大学の国際化業務をお手伝いする機会をいただきました。直前の６月末までは四国経済連合会において、四国の経済・産業・社会の持続的な発展を目指す観点から、国や県、大学など関係機関の方々と連携し、様々な活動に携わってきました。インターナショナルオフィスでの仕事は大変光栄ながらも、そのミッションの重さと、学内における内なる国際化のハードルの高さにやや当惑しつつ、まずは徐々に走りながら思案を巡らせております。

ところで、国際化の視点から企業の動きを見ると、中国・インドなど新興国の経済成長を背景に、主要企業は成長戦略の軸足を海外に移し、人材や設備・資金といった経営資源のグローバルな再配置を加速化しているのはご承知のとおりです。経営トップや幹部に外国人を登用する企業、一定水準以上の外国語能力を幹部職位への昇進基準とする企業、さらには社内公用語を英語とする企業さえも現れています。四国においても多くの企業が海外に拠点を持ち、海外との関わり無くしてはこれからの生き残りが難しい状況となってきています。

このような経済社会の流れの中で、大学に対する国や地域・企業の期待や評価も大きく変わりつつある現状を認識する必要があります。優位を誇ってきた日本の技術力・経済力に陰りが見られる中、今後、大学は、研究・人材育成の両面において、国際化への明確な対応機能や貢献力を持ち、それらを実際に発揮し評価されなければ、存在意義を問われかねない状況になってきているのではないかと考えます。KUIO での仕事を通じ、香川大学から海外諸国の発展に貢献できる世界水準の研究やプロジェクトが次々と生まれ、国境を越えて世界で活躍する人材が数多く巣立ち、地域の国際化に貢献する「グローカルキャンパス」を実現できるよう、いささかでもお役に立てれば幸いです。

平成22年度前期インターナショナルオフィスの活動

協定締結調印

本学では2010年４月以降、現在までの間に以下の協定を締結しました。

2010年４月14日　本学工学部及び大学院工学研究科と漢陽大学工学部第四群との学術交流協定及び学生交流プログラムに関する実施細則

2010年５月10日　本学とシェレバングラ農科大学との学術交流協定及び学生の交流に関する実施細則、本学農学部及び大学院農学研究科とシェレバングラ農科大学農学部との学術交流協定に関する実施細則

2010年６月１日　本学農学部及び大学院農学研究科とブルゴーニュ大学アグロスップ校との学術交流協定及び学生の交流に関する実施細則

2010年７月８日　本学とカンピエーネ技術大学との学術交流協定及び学生交流プログラムに関する実施細則、本学工学部及び大学院工学研究科とカンピエーネ技術大学機械システム研究科とのインターンシッププログラムに関する協定

2010年７月９日　サボア大学と本学のオープンレクチャー試行のための細則

2010年８月24日　本学とチェンマイ大学とのダブルディグリープログラムに関する覚書

平成22年度インターナショナルオフィス FD･SD ワークショップ(第１回､第２回)を開催

本年度からシリーズで始まったインターナショナルオフィス FD・SD ワークショップの第１回と第２回が開催されました。第１回は平成22年５月19日(水)に幸町キャンパス、医学部、工学部、農学部の各キャンパスを遠隔会議システムで結んで実施され、本学教職員49名の参加がありました。田港インターナショナルオフィス長の挨拶に引き続き、ロン・インターナショナルオフィス副オフィス長が「インターナショナルオフィスの仕組みと体制」について報告しました。

第２回は平成22年８月３日(火)に開催され、前回同様、各キャンパスを遠隔会議システムで結び本学教職員約40名が参加しました。ロン・インターナショナルオフィス副オフィス長からの「香川大学の国際戦略－インターナショナルオフィスからの提案－」、ならびに飯田インターナショナルオフィス副オフィス長からの「国際化の基本方針と重点戦略課題」と題する報告がありました。

第１回、第２回とも、報告後の質疑応答・意見交換では、各部局の国際交流に関する活動の報告や、インターナショナルオフィスの活動についての要望、提案なども含め活発な意見があがり、今後各部局と協力して国際交流を推進していくための貴重な意見交換の場となりました。

（インターナショナルオフィス　細田尚美）

第１回 FD･SD　幸町キャンパス会場の様子

第２回 FD･SD　幸町キャンパス会場の様子

国際研究支援

国際研究支援のための取り組み

国際研究支援センターでは、学内における国際的な研究の推進に取り組んでいます。今年度前半に行った主な取り組みとしては次のようなものがあります。

欧州連合(EU)が組織する、日本における欧州研究の拠点「EU インスティテュート・イン・ジャパン」設立に向けた準備調査を行いました。この事業を通じて EU との交流を拡大させる目的で、名古屋大学環境学研究科社会環境学専攻地理講座や秋田国際教養大学との間で教育研究プログラムの連携について話し合いました。

さらに、若手研究者が世界水準の研究に触れ、世界のさまざまな課題に挑戦する機会拡大を図る「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」（日本学術振興会）へ応募した 5 つの学部・研究科に対する支援を実施しました。

また、**本センターでは、学内における国際交流や国際研究支援に関する情報を一元化するため、国際研究支援センター(CIRC)のホームページを試験的に立ち上げました。ホームページのアドレスは http://dlpweb.ed.kagawa-u.ac.jp/main/?page_id=33です。ご活用ください。**

（インターナショナルオフィス 細田尚美）

The 3rd Joint Symposium between Chiang Mai University and Kagawa University

平成22年 8 月24日(火)－26日(木)の 3 日間、 3 回目となるチェンマイ大学(タイ、1990年 4 月協定締結)との合同シンポジウムが開催されました。第 1 回(平成19年12月)をチェンマイ大学で、第 2 回(平成20年10月)を香川大学で開催し、第 3 回となる今回はチェンマイ大学で行われたものです。本学からは、一井学長や田港副学長(国際・連携担当、インターナショナルオフィス長)、田島理事・副学長(学術担当)を始め、46名の教職員および学生が参加しました。

今回のシンポジウムでは、“Healthy Aging Society”をメイン・テーマに、“Agriculture and Biotechnology” “Medicine, Science and Engineering” “Humanities and Social Sciences” “Healthy Aging Society” の 4 セッションで 1 日目と 3 日目に研究交流(口頭発表、ポスター発表、パネル・ディスカッション)が行われました。2 日目には、翌日のディスカッションに活かすべく、Field Trip としてチェンマイの日本人長期滞在者のコミュニティ(CLL : Chiang Mai Long stay Life Club)および地元タイ人高齢者のコミュニティ(Tha Kwang Elderly Group)を訪問し、意見交換や情報収集を行いました。

また、 1 日目のオープニングセレモニーでは、両大学間のダブルディグリーに関する調印式も併せて行われ、 3 日目には、今後の交流推進および第 4 回シンポジウム開催へ向けたラウンドテーブルも行われました。

（インターナショナルオフィス　正楽　藍、塩井実香）

シンポジウムの様子

両大学参加者による集合写真

チェンマイ大学生によるタイの舞踊
（懇親会にて）

表敬訪問

バッタンバン大学長が学長を表敬訪問

2010年４月１日(木)にバッタンバン大学Touch Visalsok学長が本学学長を表敬訪問しました。

Touch Visalsok学長は2004年に愛媛大学大学院連合農学研究科を卒業しており、本学教員との交流を経て今回の学長表敬訪問に至りました。

香川大学からは一井学長、田港副学長、早川農学部長、小川農学部教授が出席し、Touch Visalsok学長からバッタンバン大学の紹介、周辺地域の気候や農作物の説明等がありました。

バッタンバン大学は総合大学であり本学との交流の発展の可能性が高いことから、現在大学間交流協定締結にむけて準備を進めています。

（国際グループ　宮下真来枝）

写真左から：Touch Visalsok学長、一井学長、田港副学長

ブルネイ・ダルサラーム国保健省関係者が学長を表敬訪問

写真左から：一井学長、Dr Elizabeth Chong Siew Foon 氏

2010年４月６日(火)にブルネイ・ダルサラーム国保健省　Dr Elizabeth Chong Siew Foon 氏他が本学学長を表敬訪問しました。

ブルネイ・ダルサラーム国保健省と本学医学部は2009年12月に国際協力に関する覚書を締結、ブルネイ・ダルサラーム大学と本学は2009年11月に学術交流に関する覚書を締結しており、本学医学部を中心に学生・教員共に活発に交流を行っています。

学長との懇談では、本学の沿革、部局等の紹介や国際交流の状況等についての説明や、ブルネイ・ダルサラーム国の医療の状況等についての意見交換を行い、終始和やかな雰囲気の懇談となりました。

（国際グループ　宮下真来枝）

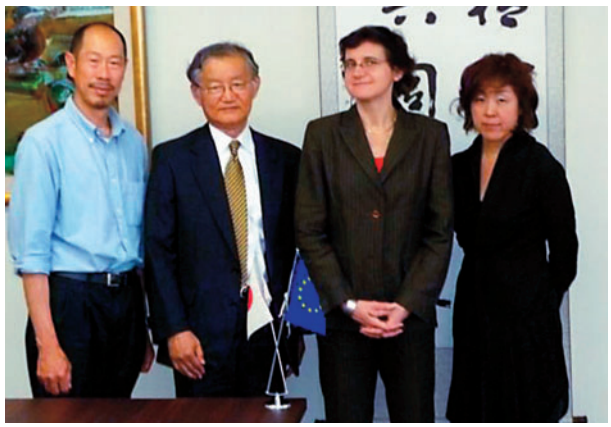
駐日欧州連合代表部広報部次長が副学長を表敬訪問

2010年６月25日(金)に駐日欧州連合代表部広報部マリエレーヌ・ヴァレイユ次長他１名が本学副学長を表敬訪問しました。

マリ　エレーヌ・ヴァレイユ次長は本学で開催される「第31回（2010年度）EUiセミナー」（６／24－25）に参加して、講演等を行うため来学しました。

副学長との懇談では、本学の概要や本学における海外からの留学生の状況の説明の後、欧州の高等教育の質を高めることを目的としたエラスムス・ムンドゥスという計画について意見交換を行いました。

その後、マリ　エレーヌ・ヴァレイユ次長は、本学研究交流棟５階研究者交流スペースにおいて学内、学外者を対象として「欧州連合「統合欧州」のシンボル」について講演を行いました。（国際グループ　宮下真来枝）



写真左から：ロン留学生センター長、田港副学長、マリ　エレーヌ・ヴァレイユ次長、駐日欧州連合代表部広報部友田　真理氏

輔仁大学日本語文学系副教授が訪問

平成22年７月13日に台湾の輔仁大学から、日本語文学系　楊　錦昌副教授及び中村副教授が訪問されました。年２回の本学留学生センター主催日本語語学研修プログラムには、毎回優秀な受講生が参加し、喜んで帰国しているとの報告を受けました。また、本学と輔仁大学との国際交流協定締結への可能性や、６ヶ月～１年間の本学留学生センター主催の日本語語学研修プログラムの実施計画、輔仁大学語学センター主催の中国語語学研修プログラムへの本学学生の参加等、学生交流を盛んにしていきたいとの意見を交換しました。

（国際グループ　宮脇みどり）

左から　正楽講師、輔仁大学中村副教授、
輔仁大学楊副教授、ロン教授、高水講師、塩井講師

左から　正楽講師、輔仁大学中村副教授、
輔仁大学楊副教授、ロン教授、高水講師

香川大学帰国留学生ネットワーク中国支部会員報告会等を開催

2010年８月20日（金）に本学において、香川大学帰国留学生ネットワーク中国支部会員報告会及び懇親会を開催しました。

報告会に先立って行われた学長表敬訪問では、本学からは一井学長、田港副学長他２名が出席し、帰国留学生ネットワーク中国支部からは康跃虎会長をはじめ会員７名と家族３名の参加がありました。

報告会には本学からは一井学長、田港副学長、帰国留学生の元指導教員他12名が出席し、一井学長から歓迎の挨拶と本学の近況報告の後、帰国留学生７名から、近況報告や在学中に受けた指導への感謝の言葉がありました。また、報告の後の意見交換では今後このネットワークを活用した交流の方法について活発な議論が行われました。

香川大学帰国留学生ネットワーク中国支部は、2008年12月に元留学生で現在天津農学院の崔教授が幹事となり、北京においてOB会を開催したことをきっかけとして設立され、2009年６月に中国北京で香川大学帰国留学生ネットワーク中国支部設立総会を開催しました。今回は、中国支部の会長、副会長等会員の方々が本学を訪問するという形で交流が行われました。また、報告会の後は懇親会が行われ、一井学長や久しぶりに面会した元指導教員と和やかな懇談が行われました。

（国際グループ　野田順子）

学長表敬訪問の様子

報告会の様子

学生向けガイダンス・研修・説明会

新入留学生ガイダンス・歓迎会

本学は今年４月、新たに57名の留学生を迎えました。４月10日(土)、新入留学生のチューターとなる日本人学生および先輩留学生にも参加してもらい、研究交流棟にて、留学生センター主催による新入留学生ガイダンスを行いました。ガイダンス終了後には、会場を大学会館に移し、ICES（異文化交流会）の学生や地域の方々も参加しての歓迎会を実施しました。

翌日11日(日)には、KUFSA（香川大学留学生会）・ICES 主催による初の試みとして、栗林公園で新入留学生とのお花見が行われ、新入留学生はこの２日間で、香川での新生活のための下地と仲間を作ることができました。

（インターナショナルオフィス　塩井実香）

海外語学研修ガイダンス・研修生帰国報告会の報告

５月26日(木)、幸町キャンパスと工学部、医学部にて、海外語学研修ガイダンス・研修生帰国報告会を開催しました。また、６月９日(水)、農学部にて、海外語学研修ガイダンス「語学研修のすすめ」を開催しました。

夏休み期間中の海外（カナダ、オーストラリア、韓国、中国）の大学での語学研修に関心をもつ学生向けに、研修先大学や研修コースの紹介、ホームステイ、渡航中の危機対応などについて説明しました。研修生帰国報告会では、平成21年度、ビクトリア大学とブリティッシュコロンビア大学での研修へ参加した大谷恵さんと福本香緒里さん（教育学部４年生）が体験談を発表し、約10ヵ月間の研修で学んだことを、これから海外へ出ようとする学生らへ紹介してくれました。

海外の大学での語学研修へ関心のある学生はインターナショナルオフィスへお問い合わせください。

（インターナショナルオフィス　正楽　藍）

体験談を発表する大谷さん

ガイダンスを聴く参加学生ら

「アジア人財資金構想」高度実践留学生育成事業の報告

ビジネス日本語・日本ビジネス教育

5月13日(木) 本事業の「ビジネス日本語・日本ビジネス教育」の講義が始まりました。厳しい就職状況の中、就職活動後半をどのように活動するか、そして、就職後に必要とされる知識を学んでいきます。

四国地域合同研修会

6月19日(土)、経済産業省委託事業「アジア人財資金構想」高度実践留学生育成事業・四国地域合同研修会へ参加しました。

本研修会は四国経済産業局と四国生産性本部主催により、高松市栗林公園で開催され、喜代美山荘　花樹海　代表取締役　三矢様による「おもてなしの心をビジネスに活かす」の四国講座の後、社員教育インストラクター　中澤様による食事マナーに関する講義、そして、和食テーブルマナー講習を受けました。サービスやおもてなしの精神を学ぶと共に、心得ておきたい食事のマナーを体験することができました。和食テーブルマナーの後は、和室での作法や名刺交換のマナーなどの講習も受けました。参加した留学生はお箸の持ち方やお茶の飲み方、和室での歩き方など、初めての体験に驚きながらも新たな発見の連続だったようです。卒業、修了後、研修会での体験を勤め先の企業で実践してもらいたいと思います。

本研修会へは、本事業へ参加する四国の他大学の留学生と「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成事業へ参加している留学生5名も参加しました。普段交流する機会の少ない留学生同士の交流の場にもなりました。

（インターナショナルオフィス　正楽　藍）

講義風景

和食テーブルマナーを学ぶ留学生

第12回日本語語学研修プログラム報告

協定大学を中心に、海外より学生を受け入れて実施してきた留学生センターの日本語語学研修も、今回で第12回となりました。6月28日(月)から7月9日(金)までの2週間、台湾・韓国より計7名の学生を受け入れ、授業・日本文化体験・学外見学（栗林公園、四国村）・ホームステイ等を行いました。

今回初の試みである「盆踊り」体験では、研修生全員が浴衣を着て、香川の伝統的な盆踊りの一つである仏生山踊りを習いました。浴衣は初めてという学生も多く、印象深かったようです。また、異文化交流会ICESの学生が、「Buddy制度」として研修生と1対1でペアを組み、生活サポートや交流に一躍買ってくれましたが、これも今回初の試みであり、今後に活かせる取り組みとなりました。

（インターナショナルオフィス　塩井実香）

華道

日本人へのインタービュー結果発表

盆踊り

第13回日本語語学研修プログラム（河北医科大学）報告

平成22年７月27日(火)～７月30日(金)の間、香川大学留学生センター第13回日本語語学研修プログラムが実施されました。今回のプログラムは、医学部が国際交流協定を締結している河北医科大学からの要望により実施したもので、多数の受講希望者から選ばれた15名の受講生達の、日本語をもっと勉強したい、日本は綺麗な所だ、将来は日本に留学して医学博士を取得したい等、目を輝かせて夢を語る姿が印象的でした。

最終日の修了式には、医学部から阪本医学部長を始め徳田教授・竹内教授・三宅准教授も出席し、引き続き行われた情報交換・反省会では、仏生山国際交流会の方々やICESの学生達も参加しました。留学生達は、研修の成果発表として「四季の歌」を斉唱したり、仏生山国際交流会の方々が用意してくださったはっぴを着て、盆踊りを踊り、日本での賑やかな楽しい一時を過ごしました。

本学と河北医科大学の交流は、学生交流を中心として、今後より一層の発展が期待されます。

（国際グループ　宮脇みどり）

開講式の様子

情報交換・反省会にて河北医科大学の教員・受講生達、仏生山国際交流会の方々、ICESの部員達、医学部教員、留学生センター教員

「平成22(2010)年度外国人学生のための進学説明会(大阪)」の報告

７月18日(日)、グランキューブ大阪にて日本学生支援機構（JASSO）主催「外国人学生のための進学説明会」が行われました。この説明会は、進学を目指して国内の日本語学校等で学んでいる外国人学生に情報を提供するためのイベントですが、例年、日本語学校の教員も多く訪れています。今回は、サテライトオフィス大阪の南野特任助教(昨年に引き続き)、国際グループより市村グループ員、留学生センターより高水(２年ぶり）の３名での参加となりました。

会場は報告者が以前参加した際とは異なる熱気に包まれており、本学ブースにも多くの時間帯に列ができていました。質問傾向の変化も見られ、以前はまず「香川大学はどこか」を尋ねられることが多かったのに対して、今回は自分の興味のある専門分野についての質問が一段落してから、「どこですか」と尋ねられることが多かったのが印象的です。

加えて、以前は日本語学校の教員に「連れられて」来た、という感じの学生が多かったのですが、今回は自ら積極的にいろいろ尋ねている姿がよく見られました。質問内容自体にそれほど大きな変化はなく、やはり入試に関するものが多い点も変わりませんでした。

今年度は、岡山の日本語学校における同種のイベントにも参加が予定されており、そちらの来訪者も含め、学生の皆さんが本学への進学を真剣に考えてくれることを期待しています。

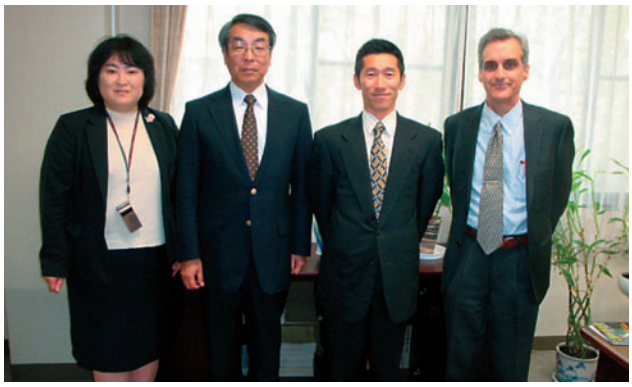
（インターナショナルオフィス　高水　徹）

各部局の国際交流行事

教育学部―CPIT 林秀樹さんが教育学部を表敬訪問

平成22年５月24日に、クライストチャーチ総合技術大学（CHRISTCHURCH POLYTECHNIC INSTITUTE OF TECHNOLOGY ; CPIT）のマーケティングと，留学生サポートスタッフである林秀樹さんが香川大学教育学部を訪れました。有馬学部長を表敬訪問し、高木由美子国際交流委員会副委員長，CPIT 担当兼国際交流委員の Paul Batten 講師同席の下，学生交流や研究や交流について活発な議論がなされました。CPIT は、創立100年の教育実績を誇る国立の教育機関です。クライストチャーチ市の中心部から徒歩圏内にあり、世界50ヶ国から留学生を受け入れているニュージーランドを代表する学校です。本学部との交流は順調で，2002年の交流開始から100人以上の香川大学生が CPIT で学んでいます。現在長期留学生が留学しており，2010年度も，短期長期学生合わせて８名が学びにゆく予定です。研究者交流も今後益々交流が盛んになると思われます。

（教育学部　高木由美子）



左から高木准教授、有馬学部長、林秀樹さん、Batten 講師

教育学部―コロラド州立大学 Masako Beechen 講師及び日本語専攻学生短期訪問

平成22年５月27日～31日に、コロラド州立大学人文学科の Masako Beechen 講師と日本語専攻学生４名が来日しました。コロラド州立大学は、1870年に創立されて以来、優れた学術プログラムを提供していることで世界的に高い評価を受けています。キャンパスは、コロラド州フォートコリンズ（人口134,000人）にあります。同市は１年間のうち、晴天の日が平均して300日もあり、複数の雑誌に全米で最も住みやすい街の１つとして紹介されています。

Masako Beechen 講師は、協定締結以来、毎年来日されており、学生の短期・長期訪問も、４年目になりました。本年度は、学部長表敬訪問、香川大学学生とのホームステイを含む学生交流、本学の英語授業参加，附属高松中学校での実習事業の実施などを行いました。今回の短期訪問事業は、本学学生、附属学校園の生徒にとって貴重な異文化交流体験になりました。また、コロラド州立大学の学生は、将来 ALT に応募し、日本に来て生徒を指導するための貴重な経験を積むことができました。

（教育学部　高木由美子）

医学部―ロンドン大学セントジョージ医学校のマックローリー教授による Problem-Based Learning の FD 等を実施

平成22年５月23日～27日に、ロンドン大学セントジョージ医学校の国際交流担当副学部長ピーター・マックローリー教授をお迎えしました。医学教育の権威であるマックローリー教授は、５月24日には、医学教育を担当する教員と合同で「医学教育セミナー」を開催し医学教育についての意見交換を実施しました。その後、教員向けの FD として、医学部の学生をたちを使って PBL のデモンストレーションを行いました。教育に熱心な教員が多数参加してのインターアクティブな FD になりました。

25日には、本学の学生を対象とした講演会が実施され、まず学生たちから、ロンドン大学セントジョージ医学校やブルネイ・ダルサラーム大学との交流活動報告を行った後に、学生の時に海外留学をすることの意義について語っていただきました。長年の経験に裏打ちされた説得力のあるお話がありました。講演会終了後には学生が主催した懇親会で様々な質問にも対応していただきました。

（医学部　徳田雅明）

医学部―ミラクル・ツインズによる移植に関する公開講演会を開催

平成22年５月17日（月）夕刻に、臨床講義棟２階講義室において国際交流委員会主催の標記講演会を公開にて実施しました。

アメリカのカリフォルニア州に住む、アナベル・ステンツェルとイサベル・ステンツェル・バーンズの双子の姉妹は、遺伝性の“膵嚢胞性線維症 Cystic　Fibrosis”という病気を肺移植治療により克服した貴重な体験の持ち主で、ミラクル・ツインズと呼ばれています。この病気は、肺や膵臓などに粘度が異常に高まった分泌物が詰まり、正常な働きが阻害される子どもの慢性難治性疾患です。欧米では約2,500に１人の出生と高率であるのに対して、日本では約35万人に１人の極めて稀な疾患です。従来平均余命は７～８歳でしたが、現代医療の進歩により余命は30歳を越えました。

講演で二人は、子供の頃から増悪する呼吸困難を抱え死の恐怖に怯えながらの暮らし、肺のドナーに恵まれ移植を受けた経験、移植後の生きている実感と感謝の気持ちなどを切々と訴え参加者に大きな共感を与えました。また臓器移植への偏見や抵抗を払拭しドナーとなることが如何に重要かを訴え、脳死からの移植の意味や意義についても述べられました。なおこの講演会は、徳島文理大学と県立保健医療大学へは遠隔ネットワーク配信しました。

（医学部　徳田雅明）

医学部―河北医科大学の派遣団が医学部等を表敬訪問

平成22年６月15日～17日に、中国の河北医科大学から段恵軍副学長、張海林教授、張文軍教授の３名の先生方が香川大学医学部を訪れました。17日には阪本医学部長をはじめ国際交流委員会のメンバーと具体的な交流の方向性について議論をした後に、幸町キャンパスに一井学長を表敬訪問し、大学全体としての交流の可能性について議論がなされました。その日の午後には医学部で張海林教授による講演会が開かれ、研究レベルでの交流も深まりました。７月26日には１週間の予定で、河北医科大学から日本語研修に学生が訪れます。香川からの学生派遣も計画中で、今後益々交流が盛んになると思われます。

（医学部　徳田雅明）

地域マネジメント研究科―ビジネススクール一般公開講演会　ロサンゼルス月刊英字新聞「カルチュラル・ニュース」編集長 東繁春氏によるシンポジウム

インターナショナル・オフィスの後援で2010年６月15日（火曜日）ロサンゼルスから東繁春氏（「カルチュラル・ニュース」発行者・編集長）をお招きしてシンポジウムを行いました。

地域の情報発信能力の育成と国際化の必要性が唱えられて久しいものの、課題は多く残されています。他方、米国においては、近年のマンガ・アニメなどのポップカルチャーだけでなく、古くからの美術・庭園・茶道・和太鼓などの伝統文化を含め、日本文化の情報に対するニーズは、日本人が想像する以上に大きいものがあります。

ロサンゼルスをベースに日本文化情報を英語で発信し続けている月刊英字新聞「カルチュラル・ニュース」の発行者・編集長である東繁春氏をお招きし、米国における日本文化に対する関心の高まりの実際、「カルチュラル・ニュース」が果たしている役割と与えたインパクト、更なる文化情報発信の課題と可能性などについて、現在進行しているさまざまな変化の動向を踏まえつつ、12年間の英字新聞発行の経験を通して語っていただきました。

（地域マネジメント研究科　板倉宏昭）

東繁春氏による講演

地域マネジメント研究科―マサチューセッツ工科大学宮川繁教授による講義

2010年７月13日（火曜日）にはマサチューセッツ工科大学教授宮川繁先生による講義「グローバル・オープンコースウェアーの最近の動向」を実施しました。

オープンコースウェアー（OCW）は、2002年にアメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）で始まり、７年後の現在、世界中に広がっています。MIT は、すでに全学の学部・大学院のほぼ全ての科目1,800以上の教材を無料で公開し、毎月、世界中から120万人ほどの訪問者にアクセスされています。グローバル・オープンコースウェアー・コンソーシアム（GOCWC）も立ち上がり、世界の200以上の大学が既に各大学の教材を無料で公開し始めています。

GOCWC の中で、日本 OCW コンソーシアムの活躍が目立っています。2004年に６大学で始まり（阪大、京大、慶應、東工大、東大、早稲田）、現在、20以上の大学がメンバーになっています。OCW は、スタンフォード大学やイエール大学にも見られます。

大学にとっても、入学志願者の増加や教育レベルの向上など多くのメリットがあります。

（地域マネジメント研究科　板倉宏昭）

宮川繁氏による講義

留学生の声

ため池での水質汚染対策を学びに香川大学に来ているフランスのセバスチャン・バーデさんが日本の食習慣について寄稿してくれました。色彩豊かで素材自体の味を大切にする和食を楽しんでいるというセバスチャンさん。彼の目から見た稲作やコメの可能性はいかなるものでしょうか？

Food habits

Sébastien Bardet(France)

I am Sébastien Bardet coming from a 2000 people French village with a small convenient store, an elementary school and many cattle farms. The report deals with Japanese culture seeing by a French after two months in Kagawa University in Takamatsu. This brief introduction first explains my surprise when Japanese told me that Takamatsu is the country side of Japan. For me Takamatsu is the biggest town I have ever been living in. Of course I went to big towns such as Lyon, Paris, Boston, New York, Manchester, Barcelona, Liverpool, and London but only sightseeing never more than a few days. I cannot imagine what would be my feeling if I were staying in Osaka or Tokyo for my internship! For sure it would be a bigger change of scene. This is to say that I like Japan way of life, with a high sense of respect and civility in the street in the shop and in the work. I am not used to live in big town but this helps me a lot to deal with daily life. Moreover green areas are never too far and I can enjoy a walk on Yashima plateau and Goken Mountain when I feel like I need fresher air and exercise.

One of the biggest differences between France and Japan is food habits highlighted with chopstick utilisation. How funny is it for western people to watch Asian eating with a fork and a knife! It is the same for Japanese to laugh at western chopsticks beginner. Now I start to understand why some Japanese are so proud of their food.

The first difference I notice is the number of dishes. There are many and of very different colour, taste, ingredient. Therefore it must be a nightmare to cook a Japanese meal but it is a delight to watch and savour. In France we usually cook some starter plus big main dish with vegetable and meet (or sometime fish). And always finish the meal with cheese and dessert.

The second point is the way of cooking and the sauce. As far as I know soya sauce is high on Japanese habits. Whereas French sauces vary widely from cream sauce to tomato sauce and also oil and butter. As France cuisine, Japanese use many cooking process such as fried, boiled steamed… Although the rice in France is cooked differently and Japanese don't like it.

The third difference is in the flavouring. The custom in France is to use salt and pepper (I try not to use too much) whereas in Japan, dishes are not salty or highly spicy. For example in restaurant they don't have salt shaker on the table. In France we always have a sweet dessert whereas Japanese don't bother not having sweet dishes in the end of the meal. Japanese desserts are not as developed as French dessert and also not as much sweetened. I am tempted to say that Japanese cuisine consist in highlighting real ingredient and component taste whereas in France addition of sauce and seasoning hide the original taste of the food and create a more powerful taste (I don't say it is good or bad).

I guess this combination of "traditions" makes Japanese diet one of the healthiest of the planet (with Mediterranean food) low salt, low sugar, low fat and cream, various dishes and diverse ingredient in the same meal but small portion. Seaweed (in soup or steamed) seems common in Japanese dish and contains high level of healthy mineral. Being an island fish is the base of protein intake which is widely known to be very healthy with good fat. Japanese fish consumption is subject to controversy at international level and many people accuse Japan to deplete fish stock (70 kg per people per year opposed to 34 kg per people per year in France). I don't know who is to blame because Japan is an island and fish has always been part of Japanese diet. Would it be better if people consumed meet instead of fish? I don't know but both (fish and meet) consumption has an increasing impact on human ecological footprint on the planet.

I cannot write about Japanese food without quoting rice, which is the base of the alimentation. In France the base is much different and we eat equally wheat, corn and rice. As an environment student interested in sustainable development I would like to say that high consumption of rice is well adapted to high density country with lot of water resources and small area available for growth such as Japan. The productivity of rice is twice higher than other cereals so I thing this is a good solution to "feed the world" although growing rice release huge quantity of methane an important green house gas. I think that agriculture leaders should pay attention that in inadequate climate, rice culture consume huge quantities of water and lead to water shortage. In France corn also require large amount of water during dry summer, therefore water resources management is becoming more and more difficult and tensed.

In order to conclude I would like to say that for me it is a pleasure to eat and taste new food. From my childhood my mother always made me eat various dishes and taste therefore now I can enjoy a strange unknown taste, when other western people would just say : No it is strange, I don't like it.

香川大学
インターナショナルオフィスニュース
第３号　2010(平成22年).9.30

香川大学インターナショナルオフィス
〒760-8521　高松市幸町１-１
Tel：087-832-1194　Fax：087-832-1192
E-mail：soryucet@jim.ao.kagawa-u.ac.jp
http://www.kagawa-u.ac.jp/kuio/index.pub